

琉球大学学術リポジトリ

[研究動向] 玉城政美(TAMAKI Masami)著 『琉球歌謡論』

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, 學, Oshiro, Manabu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34025

[研究動向]

玉城 政美 (TAMAKI Masami) 著

『琉球歌謡論』

砂子屋書房(東京) 2010年1月 548頁

大 城 學 (ŌSHIRO Manabu)

玉城政美氏は琉球諸島にまたがる地域の祭祀や歌謡を調査・研究された優れた研究者であった。玉城氏と一緒に調査したことに若干ふれながら、氏の琉球歌謡研究の一端をみてみたい。1983年度から2年間、沖縄県教育庁文化課は国庫補助事業で「御嶽信仰習俗分布調査」を実施した。調査は初年度が沖縄諸島で、2年目は宮古諸島及び八重山諸島であった。84年度から民俗文化財も担当するようになった筆者は、同事業の2年目を引き継いだ。以前から、琉球歌謡のなかの儀礼歌謡がうたわれる〈場〉の調査をやってみたくと話していた玉城氏に、調査員として協力していただいた(玉城氏は調査員長)。

同事業は1713年編纂の『琉球国由来記』記載の御嶽の現況を確認することが第一のねらいであった。調査項目は①名称(異称を含む)、②『琉球国由来記』記載名称、③所在地、④立地・構造・変遷(現況・形態図)、⑤主な祭祀者、⑥主な年中祭祀、⑦祭神、⑧由来、⑨形態・位置図、⑩写真、⑪その他、であった。八重山諸島の調査では、玉城氏の提案で御嶽の基本的な構造を把握するために一級建築士に調査員に加わってもらい、形態図を作成してもらった。

この調査をとおして玉城氏が強調されたことは、村落共同体の祭祀が行われる〈場〉を確認することができたので、今回は祭祀のなかでうたわれる儀礼歌謡の実態を理解するために共同で調査してみたいということだった。早速、文化庁と調整。1987年度から5年間、沖縄県教育庁文化課において国庫補助事業として無形民俗文化財記録作成「沖縄の神歌」を実施した。対象地域は沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島である。玉城氏に調査員長をお願いした。調査項目は(1)儀礼〔①儀礼の概説、②目的、③組織、④過程、⑤地図、⑥歌謡目録〕、(2)歌謡〔①歌謡(歌詞及び逐語訳)、②歌謡に伴う儀礼的所作、③歌形、④歌唱法〕、(3)主な年中行事、であった。

従来の歌謡集や歌謡調査報告書にはみられなかった歌形、歌唱法による分析という新しい方法を取り入れることを玉城氏が提案された。氏は1970年代後半あたりからこの分析方法によって「オモロの歌形」をはじめ数多くの論文を発表していて、これらの論文は氏の高著『南島歌謡論』(1991年、砂子屋書房)におさめられた。歌形や歌唱法などの研究が基礎にあって、氏の歌謡研究が一段と深まっていったと筆者は考えている。歌謡の実態を把握するために用いた歌形や歌唱法による研究とはどのようなものなのか。報告書『沖縄の神歌』の凡例に示された氏による用語の定義をみてみたい。

1. 詩形……南島歌謡の歌詞は、ことからの展開を叙述する〈対句〉と、それに添えられる〈反復句〉を要素として構成される。また対句を構成する単位をそれぞれ〈対句項〉とよぶ。詩形は基本的に対句を継起的に結合して構造化される。
2. 曲形……同一旋律の反復によって構造化された曲の要素をそれぞれ〈節〉とよび、一対句項をおおう旋律を基本的な単位として、それらが1節内でどのように構造化されているのかを抽出したものが曲形である。

3. 歌形……詩形と曲形が結合して分析・総合された構造を歌形とよぶ。
 4. 節……反復する旋律のひとまとまりを節とよぶ。

〔例〕	1	きゆぬびーば	むとうばし	A	a
		くがにびーば	むとうばし	A'	b
		ウヤキユバナウレ		R ₁	z
		ウヤキユバナウレ		R ₂	y

(注) A・A'……Rは詩形を、a・b……zは曲形をしめす。詩形的要素は対句項・反復句の順(AA'R)に構造化されている。また曲形は対句項のAの旋律をa、A'旋律をb、反復句Rの旋律をzとすると、abz構造をなしている。

5. 歌唱法……歌謡を表出する形態を歌唱法とよび、歌唱主体や歌形との関連から基本的には①復唱法、②分担歌唱法、③交互歌唱法、④斉唱法、⑤独唱法に大きく分類できる。またこれらは互いに組み合わさって新たな種類の歌唱法をつくる。

玉城氏は、歌謡ひとつひとつが、いつ、どこで、誰によって、どのようなうたわれ方をしているのか、その際に楽器を用いるのか、儀礼的な所作を伴っているのか、などといった視点で歌謡の調査研究をされた。『沖縄の神歌』報告書は、最先端の歌謡研究の方法論(理論)によって記録されたのである。

歌形論、歌唱法の研究に続いて、モチーフ論の研究がある。歌謡にあらわれた一つのできごと(=対象的な内容)をモチーフとよぶ。個々のモチーフは互いに結びついて、より大きなできごとを構築するが、モチーフ間の相互関係の問題を構造論レベルであつかっている。そして、類歌の構造分析、物語歌謡におけるヴァリエーションの生成、トゥパラーマ(雑歌)やトーガニ(雑歌)の構造と主題などの論文を積極的に発表された。

玉城氏は、琉球歌謡はまだいきて伝承されているところに魅力があって、かつ研究すべきことがたくさんあるが、学問領域としてはあまりにも若すぎるので、いくつかの方法論によって研究されるべきではないかと話していた。その一方で、氏ご自身も編者の一人であった『南島歌謡大成』(全5冊。1978～1980年、角川書店)に収められた膨大な琉球諸島の歌謡資料をデータベース化し、それを礎に歌謡研究を進めた。『琉球歌謡論』の「編集にあたって」によると、90年代半ばの玉城ゼミでは、明治期の新聞に掲載された琉歌、奄美諸島の歌謡、八重山諸島の歌謡のデータベース化がすすめられていた。幅広い文化の歌謡が継続してデータベース化され、卒業論文をまとめる学生はすべて氏からデータベース化の方法を学び、論文を作成した、ということである。

玉城氏は長年にわたる調査研究の成果として、琉球歌謡を(儀礼歌謡)(歴史歌謡)(物語歌謡)(抒情歌謡)に分類し、各歌謡の種類・うたわれる場・世界観・表現主体などの項目で体系的に論文を執筆中で、その成果を「琉球歌謡論」としてまとめる予定であった。併せて『琉球歌謡語辞典』(仮称)の構想もあったが、その作業を開始した矢先、2009年1月に急逝された。氏が存命中に構想された「琉球歌謡論」は未完になってしまった。そのことは氏ご自身ももっとも悔やんでいるであろう。

玉城氏が主宰された琉球文学研究会を中心に編集委員会が結成された。同委員会の尽力によってこれまで氏が発表された論文や未発表原稿が整理され『琉球歌謡論』として上梓された。『南島歌謡論』発行以降の論文が『琉球歌謡論』におさまったことになる。氏が構想された「琉球歌謡論・目次」は本書537～540頁におさまられている。ここでは本書の目次を紹介する。

序にかえて

第1部 儀礼歌謡

琉球の儀礼歌謡について

はじめに／第1章 他界／第2章 祭具＝施設／第3章 祭具＝鼓／第4章 儀礼行為／第5章 儀礼歌謡の機能

第2部 歴史歌謡

歴史歌謡について

1. 宗教的英雄(君南風の八重山従軍)／2. 宮古軍の英雄(金志川金盛)／3. 宮古軍の英雄(仲宗根豊見親)／4. 敗者の娘(鬼虎の娘)―バラード―

第3部 物語歌謡

物語歌謡について

はじめに／第1節 叙事的な提示方法／第2節 抒情的な提示方法／第3節 滑稽な形象／第4節 プロフィールの造型方法／第5節 事件のなかの人物

物語歌謡におけるヴァリエーションの生成

はじめに／第1節 〈マヘラズ〉系のヴァリエーション／第2節 〈イキヌブーズ〉系と〈ハエサコダ〉系のヴァリエーション／第3節 〈フネノオヤ〉系と〈ンザトーラ〉系のヴァリエーション／第4節 部分的表現の差異化

物語歌謡における類歌の構造分析について

はじめに／第1節 夫婦の経歴／第2節 離婚／第3節 実家での暮らし／第4節 復縁／おわりに

第4部 抒情歌謡

トゥバラーマ〈恋歌〉の分類

はじめに／第1章 関係の未成立／第2章 関係の成立／第3章 関係の破綻／第4章 昔の恋

トーガニ〈恋歌〉の分類

はじめに／第1章 関係の未成立／第2章 関係の成立／第3章 関係の破綻

トゥバラーマ〈雑歌〉の構造と主題

I 祝い／II 風土／III 人生観／IV 旅／V 自然／VI 歌／VII 笑い

トーガニ〈雑歌〉の構造と主題

第1章 祝い歌／第2章 風土の歌／第3章 人生観

抒情歌謡について―琉歌〈恋歌〉―

はじめに／第1章 関係の未成立／第2章 関係の成立／第3章 関係の破綻

抒情歌謡について―琉歌〈四季歌〉―

第1章 春／第2章 夏／第3章 秋／第4章 冬

編集にあたって

著者略歴・研究業績

玉城氏は琉球歌謡(文学)研究の第一人者であり、本書におさめられた数々の論文は、今後の琉球歌謡研究に大きな示唆を与える内容であり、きわめて重要であるといわねばならない。

(琉球大学)